

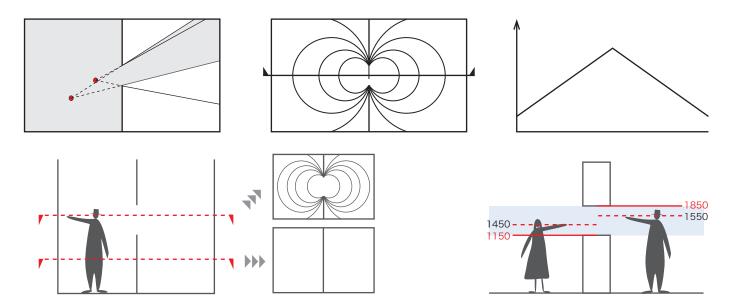
近年、都市やインターネット空間はますます拡大し、複雑化している。しかし、私たちはその状況を問題なく生活している。



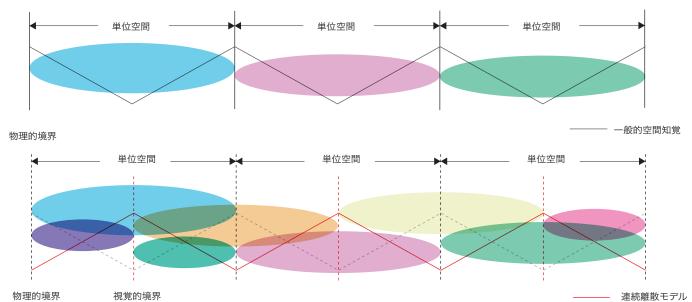
都市やインターネット空間の複雑化に対して、私たちは自分に必要な部分のみを断片的に認識し、その状況に応じた情報量を適宜取捨選択することで、 適正な解像度によって都市空間を把握し、不自由なく生活している。



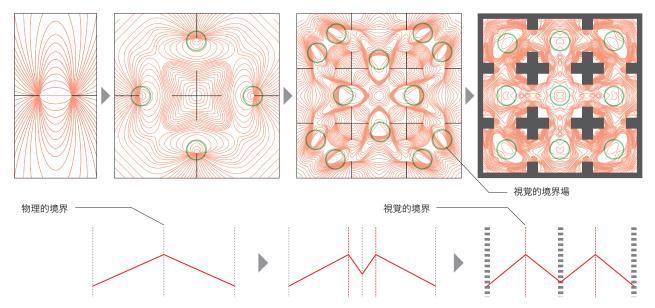
私たちはあらゆる状況に対して便宜的に、部分と全体を連続的もしくは離散的に認識することを、無意識に繰り返して生活している。このように、認識上で連続と離散という背反する概念が表裏一体の関係にあることを「連続離散」と定義する。都市空間での認識は、その状況や個人によって異なるが、絶対的な全体像を必要とする場面が無いため、認識上不確かな状況であっても、私たちは気にすること無く生活できている。



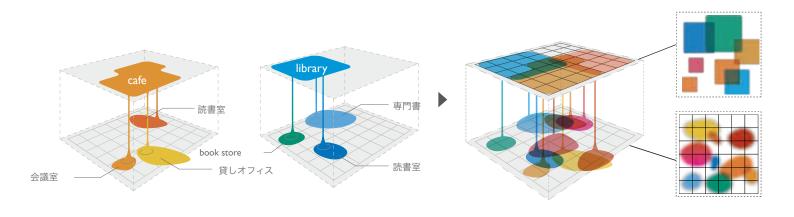
知覚と行為についてのバランスのとれた考察といわれる「Isovist」の概念を用いる。 人間は、今はこの等視場内に、次はあの等視場内にと、(視覚)空間の移動を常に繰り返しており、その空間は等視場の集積として、平滑なフロアにおいてでも、等高線(Isovist field)で表すことができ、その空間内での視覚的関係性を具現化することが可能である。



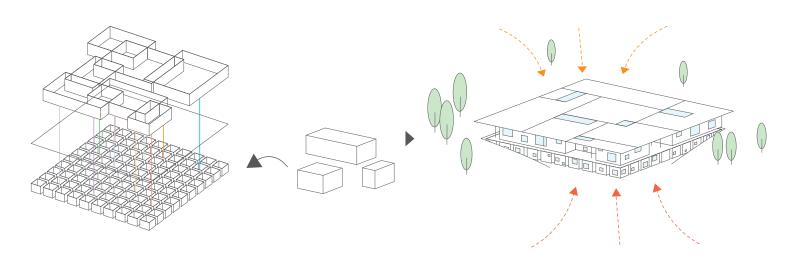
建築空間内の移動を考えたとき、一般的に物理的境界付近が外部との関係性の最も強い部分として認識され、そのグラフは谷型となる。それに対して、逆位相となるような山型 の視覚的関係性を空間に与えることで、単位空間内に視覚的境界が発生し、開口による分節が可能となる。この時、空間内での認識は、物理的境界と、視覚的境界によって、境 界のもつ認識的拘束力が弱まり、「連続離散」が導かれる。ここで、単位空間における山型で表される視覚的関係性を、「連続離散空間モデル」と定義し、空間化を試みる。



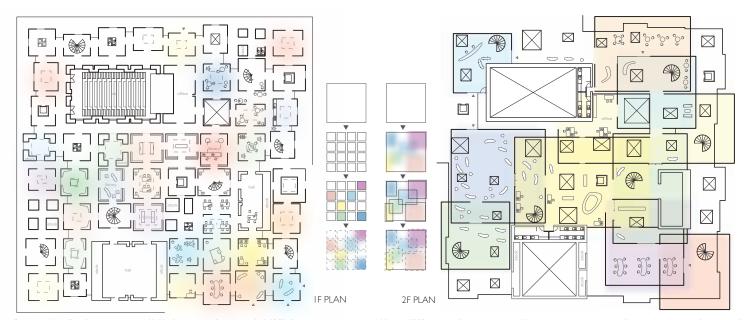
室を分節していくと、Isovist fieldに島(視覚的境界場)が現れ、分節が多くなるほど、その島は開口付近から室の中心付近へと移動していく。さらに、分節壁の厚みを増やしていくと、その状況はさらに明確なものとなる。



本修士設計は、「連続離散空間モデル」の有用性を、公共建築でありながら私的空間性の高いメディアテークの設計において検証する。個の集合に対しての公共空間と、集団の中の個に対しての私的空間に相互に適応した施設を計画する。



メディアテークに求められるプログラムを再構築し、様々なゾーニングを平面及び断面方向に重ね合わせ、多重な機能を空間に与え、機能的な連続離散を導いた。さらに「連続離散空間モデル」によって、空間に体感的な連続離散の特質を与え、建築のどの断片を取り出しても連続離散が見られるように設計した。



ゾーニングの重ね合わせによって特徴づけられた空間を、連続離散空間モデルによって連続とも離散とも認識することが可能になったことで、その状況や人によって空間の認識が変化し、空間の使われ方が柔軟に変化することが確認された。公共建築でありながら、私的利用の多いメディアテークに最適な使われ方であるといえる。



本修士設計では、認識上連続と離散という背反する概念が常に表裏一体の関係にあることを「連続離散」と定義し、空間内での視知覚に「連続離散」を応用することによって、空間を連続とも離散とも認識することが可能となるような視覚的性質を空間に与えた。



それにより、部分及び全体の関係性が認識により異なり、その状況や人に対して柔軟に適応する空間を「連続離散空間モデル」を用いて提案した。



本修士設計は、多様な用途を内包する建築に対して、人々に空間の認識を委ねることにより、それぞれの状況や人に柔軟に適応する建築設計手法として有効である。